美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

11

2018 November/December

TAKE FREE

NO.50

特集
ゆかしき庄内弁

庄内憧憬
奥泉光
作家

Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。
［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2018 November/December
平成30年11月1日発行（隔月奇数月発行）第9巻2号（通巻50号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／致道博物館 旧西田川郡役所

小春空に　明治薫る城下町

荘内銀行

心に残る方言

奥泉 光

方言でなければ表現できない情緒というものがあって、それが失われてしまうのはやはり残念である。

自分は山形庄内出身ということになっていて、たしかに生まれたのは三川町で、いまも実家があるのだけれど、育ったのは東京都および埼玉県なので、庄内弁は自由に話すことができない。

とはいえ、子どもの頃は夏休みなど長期間実家に滞在したので、庄内弁になじみはある。当時は明治十年代生まれの曾祖母が存命で、母や祖母らがいわゆる標準語も話すのに対して、庄内弁しか話さない曾祖母がディープな方言話者だったので、いまはほとんど聞かれない言葉も耳に残っている。

「朝」が「あさま」、「夜」が「ばんげ」、「お姉さん」が「あねちゃ」、お父さんが「だだちゃ」、ご飯が「まま」、冷たいが「はっこい」、「ありがとう」が「もっけだの」。このあたりはいまも使われて、音と意味のつながりにも見当がつくが、「子どもたち」を「ころびだ」、「蛾」を「べっと」、「いじっていたずらをする」を「ちょす」、「濡れた」を「やばち」などは（いまも使うのかもしれないが）だいぶ不思議で、しかし子どもの頃に耳にした自分にはさほどの違和感はない。

一九六〇年代、庄内の家に電気はあったが、水は井戸水で、土間の井戸の把手をきこきこさせると水が漏れて服が「やばち」くなったし、早朝に曾祖母が竈（かまど）に火を起こすのを横から見ていると、『ころびだ』は『ちょす』なよ」と叱られたし、網戸のない家の電球には「べっと」がたくさん集まってくるのだった。

そんななかにあって、一番不思議なのは「おたまじゃくし」の方言「げるぐど」で、これはいまだに違和感がある。数年前、いとうせいこうさんと自分が愉しく文学テクストをかたる、「文芸漫談」なるイベントを三川町のなの花ホールでやったとき、『『げるぐど』ってなんだかわかりますか？」と舞台上できくと、「それってドイツ語？」といとうさんはいっていた。ちなみにこのときの「文芸漫談」は漱石の『門』をとりあげたのだけれど、地味なテクストにもかかわらず、お客さんの反応がとてもよくて嬉しかったのを覚えている。

方言に話を戻せば、方言でなければ表現できない情緒というものがあって、それが失われてしまうのはやはり残念である。祖母のところへ村の人が訪ねてきて噂話をしている。どこかの家に不幸なことがあったのだ。そのとき祖母の発した「みじょけねの」の言葉などは、「可哀想だね」ではとても伝えられぬ情感が溢れて、いまも心にふかく残る。

黄金色に輝く三川町の田んぼ

おくいずみ・ひかる／作家。1956年、山形県生まれ。国際基督教大学大学院博士前期課程修了。86年「地の鳥 天の魚群」で注目され、93年『ノヴァーリスの引用』で瞠目反（アンチ）・文学賞および野間文芸新人賞。94年『石の来歴』で芥川賞を受賞。2003年近畿大学教授。09年『神器 軍艦「橿原」殺人事件』で野間文芸賞。12年芥川賞選考委員となる。14年『東京自叙伝』で谷崎潤一郎賞。18年『雪の階（きざはし）』で柴田錬三郎賞。多彩な手法を駆使し、現代小説の可能性に挑む。作品はほかに『パナールな現象』『浪漫的な行軍の記録』『モーダルな事象』など。また、いとうせいこう氏との漫談スタイルで文学作品を読む講座「文芸漫談」を開講。15年の三川町誕生60周年記念公演「文芸漫談シーズン4」は初の庄内開催で大好評を博した。

ゆかしき庄内弁 特集

小さい頃「むがし むがし あったけど」と祖母が読んでくれるお話は、温度や触感を持っているかのように、あたたかく、やわらかで、少しやんちゃで、流れるように美しいものでした。あの音やリズムが私たちの中にある、その誇らしさ。親愛なる庄内弁、心に、唇に、いつもふるさとを携えて。

酒田方言あそび研究会「酒田なつかしいろはカルタ」

方言は日本人の豊かな感性を表す言葉

方言と庄内

Yoji Kunohane
黒羽根 洋司

「方言は、日本語を豊かにする」黒羽根洋司さんは、鶴岡市で長く医業に従事しながら、文学にも造詣が深く現在は言葉などにまつわる郷土史研究を行っています。土地の言葉と地域性について、お話をうかがいました。

「言葉は かたちのない心の聴心器」

開業医時代、方言を患者さんとの大切なコミュニケーションツールにしていたという黒羽根さん。人が生まれ育った土地の言葉は、感情や状態を伝えるのに最適で、医師の仕事を通して、庄内弁について関心を深めたそうです。「東北地方の方言は、言葉が短いのが特徴ですが、庄内弁は一拍音で会話まででできます。『げ』食べなさい、『く』食べます、『す』します、『せ』しなさい、『そ』しましょう、のように。これには、寒さの厳しい気候の中で口を開かず話すようになったためとの説があります。また、庄内は農村社会で、小さなコミュニティ内では短い言葉で十分通じ合えたことも一説にあります。短縮化された話し言葉の特徴の一つが母音の変化です。「大根 daikon」は「でこん dekon」、「一杯 ippai」は「いっぺ ippe」、「帰る kaeru」は「ける keru」、「覚える oboeru」は「おべる oberu」など。

「方言の後ろには気候と風土、その土地の暮らしがぎっしりと詰まっている」これは鶴岡市出身の作家、藤沢周平がエッセイ『小説の周辺』に綴った言葉です。方言の一つ一つから、その土地の風土を感じ取ることができます。「土佐弁で気骨のある男性を表す『いごっそう』、青森弁で意地っ張りを表す『じょっぱり』など、人の気性を表す方言には独特の語感があります。その中で私が庄内人の気質をよく表していると思うのは『めじょけね』です」。「かわいそう」を意味するこの庄内弁は、藤沢周平作品にもたびたび登場します。「『めじょけね』は『見ずにおけない』が音声化したという説や、『無残』から転じたムゾウに由来するなどの説があります。ただかわいそうという意味ではなく、見捨てておけない、他人の痛みを自分の痛みとして受け入れ、共感する感情が読み取れます」。黒羽根さんはさらにもう一語、「はがみ」も庄内らしい言葉として挙げました。「あまり使われなくなりましたが『歯噛み』は、歯を食いしばって我慢する、辛抱するという意味があります。庄内の気候風土が象徴するように、どんなに寒い冬の日が続いてもやがて春が訪れる、そう信じてはがみをして生きる。『めじょけね』と『はがみ』は、温かく優しく、強く生きようとするこの土地の人々の美質だと思います」。

方言は日常の言葉に感情と彩りを与え、日本人の豊かな感性を表すかけがえのないもの。美しい日本語がやせ衰えてしまわないよう、地域語を自分たちの言葉として使っていくことが大切、と黒羽根さん。お国言葉はお国の自慢、その土地が生きてきた歴史を映す文化遺産です。

医療の本質は患者さんに共感的理解をもって治療に取り組むこと。方言は「共感力」を高め理解し合うことができるコミュニケーションツールです。

昭和22年、鶴岡市生まれ。整形外科医として平成28年まで市内で黒羽根整形外科を開業。「『読書のまち鶴岡』をすすめる会」代表。講演や執筆活動も行い、平成22年には高山樗牛賞を受賞。最新刊は『庄内の女たち』(ライトハウスパブリケーション)。

水などに濡れたり、しめっぽくて気持ちが悪いさま。とっさの水はねや、雨や雪で濡れ鼠になった時など、どちらかというと不快な場合に用いる。「スパネかがてヤバチぐなた」スパネは雨降りの時などに歩いて跳ね返った泥や泥水。

庄内弁を代表する一つ。むかむか、もやもやすること。考え事や心配事、不安感などで気分が悪かったり、いらだったり、焦る時などに使う。吐き気がする場合にも。

座ること、正座。「えごねまる」はリンパ腺が腫れることを表す。松尾芭蕉が「おくのほそ道」で「涼しさを我宿にしてねまる也」と尾花沢で詠んでいるが、こちらはくつろいでいる様子を表す。また他地域では「寝そべる」を意味するなど、転義や解釈の違いがある。

食べること、食う。け(食べなさい)、く(食べます)、こ(食べよう)、かね(食べない)。「食べることは人生の重大事で、根源的な日常の動作。それを一語で表現し分ける庄内弁の妙技です」と黒羽根さん。

歯を噛むこと。辛抱、がまん、忍耐すること。「ハガミしてかしぇげ(辛抱して働け)」

おめかしをする、着飾る。「じょなめでどごさ行ぐなだもんだが(おめかししてどこに行くものだか)」。同じような意味の「こっぺまげる」は「あのやろ、こっぺこいで(あの野郎いいふりをして)」のように皮肉めいた意味合いも含む。

かわいい。めんこ、めんごい、など言い方はさまざま。

かわいそう。気の毒。ミジョケネ。「相手を慮り、痛みを分かち合うような同情を感じるこの言葉は医療の本質です」。

かかと。北海道、東北で使われている。体の部位を表す方言には他にも「まなぐ(目)」「なずぎ(額)」「おどげ(顎)」「ひじゃかぶら(膝頭)」などさまざま。

酒田が生んだ歌姫、白崎映美さんの話す酒田弁を耳にするたび、おらほの言葉のめんごごど！と誇らしい気持ちになります。土地を表す言葉への大切な想いを綴っていただきました。

世界でただ一つの言葉 あたたかいおらほの宝

白崎 映美

もうすぐ庄内からは、私たちの美しい庄内弁は消えてしまうだろう。

子どもたちはみんな標準語をしゃべっている。両親、おじいちゃんおばあちゃん、保育園、幼稚園、学校の先生達は、大人同士では庄内弁でも、子どもたちには標準語なのだそうだ。ほんとで?! 庄内弁撲滅運動でもしているのだろうか？ 私にはわからない。悲しい、寂しい。

日本中、バイパス沿いには量販店、街中にチェーン店、全国どこに行っても同じ景色、のっぺらぼう化が進んでいる。その上、方言までなくなれば、ただの寂しい地方都市、ただの田舎になってしまう。

私はカッコいい、おらほの言葉でしゃべる。東京でも、うらやましいと言われる。あったかいと言われる。東京で仕事の話は標準語で話す。標準語は明治以降、そのために作られた言語だから。伝達のための標準語と、あたたかい私たちの庄内弁。バイリンガル上等！

庄内の風土から生まれて、ずっとずっとつながってきた、世界でただひとつのおらがだの言葉、あたたかい宝が、なくなりませんようにと、祈る。

酒田市生まれ。上々颱風のヴォーカルを経て、東日本大震災後に東北6県ろ～るショー!!を結成。ライブや舞台、執筆と活躍の幅を広げる。『群像』2017年3月号掲載「叫べ『ん』と」が日本文藝家協会ベストエッセイ2018に選出。著書に『鬼うたひ』がある。

song

シャンソン歌手・エディット・ピアフの歌唱で知られる「群衆La Foule」。白崎映美さんの庄内版「群衆」はまさにシャンソン！ 切ない歌詞なのに、なぜか笑ってしまう、悲劇と喜劇は表裏一体と聞き惚れる見事な訳詞です。

群衆

（庄内弁 超訳）訳詞・白崎映美

祭り来いばうがっでうるげで
人えっぺいでわちゃわちゃどなる
おいはほげほげうがっでもねんでも
酒田囃子（さかだ）さつらっでではてみだ
てーご（太鼓）笛、鉦（かね）の音（おと）
どんどんちきちどんちきち
しょわすぐで
頭（あだま）ぐわぐわでゅうようだ
まずさーまずその人混みで

いづもいねよだ人並みオラ
おぼげるよだこいだばまず
目うるうるでゅうようだ
前（め）さも後ろさも動がんねでぃや
あいやなんだがまぐまぐどなてきたでぃや
笑い声叫（さけ）び声歌（うた）声が渦みでなて
あいやまんずオラおかねぐなてきたでぃや
ほんどぎだいがのへながさ
だづっと顔おっつけらっで
ほの人こんげしておいのほさ
振り向いだんけ

（1番のみ）

鶴岡市在住の深街エンジさんは、「もっけだの」をはじめ、ネイティブな庄内弁の歌で注目されるアーティストです。庄内弁と歌について語っていただきました。

庄内弁は自分にとって ひとつの音楽ジャンル

深街 エンジ

僕が歌を作るようになったのは、ギターを背負って自転車で全国を一周していた平成23年の時でした。出会った人から自分でも歌をつくってみたらと言われて、メロディーやリズムを考えてみたんです。自分は洋楽からの影響が大きいので、曲を作ってみたら洋楽テイストになったんですね。そこに言葉をのせるなら、標準語よりも、流れるように話す庄内弁の方がしっくりくるかもと思って、うちのばあちゃんが話す言葉を思いつく限り書き出したんです。それを曲にあてはめたら、生活の風景が現れてきて。それが「もっけだの」で、初披露の場は沖縄です。たまたま同じゲストハウスに酒田の人がいたので、せっかくだからと聴いてもらったら爆笑していましたね。

言葉は時代ごとに変わっていくものだし、僕はものを考えるために言葉があればいいと思っているので、庄内弁を歌にして残そうというようなことは、あまり考えていません。でも庄内弁は、この言語じゃないと生み出せない独特のリズム感を持っています。だから僕にとって、庄内弁は大切なひとつの音楽ジャンルだと思っています（談）。

昭和56年、鶴岡市菅野代生まれ、在住。歌手、絵描き、作家と多彩な才能を持つ。現在までに5枚のCDアルバムを発表。庄内弁の曲には「もっけだの」「いいの庄内!」「いさけろ」「けりでの」がある。平成29年にはあつみ小学校校歌を作詞・作曲した。

song

幼い頃から聞いて育った「ばばちゃん」の言葉が詰まった「もっけだの」。コテコテの温海地方の庄内弁なのに、まるで軽快な洋楽！ ファーストミニアルバム『わべらうた』に収録の他、ユーチューブでも公開中。

もっけだの

わね　こしゃうなじょんだ
おどっこは　ざっこしめ
おなんこは　さべちょ
あんちゃは　たっちぇの
あねちゃは　めんごいの
だだちゃの　はんでさ
豆と酒　たがいでげ
ががちゃは　ばんげの
ままざめ　しねばね
じじちゃは　とごがら起ぎでこね
ばばちゃは　ばばひってふぐ紙ねーど
やろ物ぽっこしてごしゃがいっだ
「ほろけや！　よげだものちょすな！」
よいでねちゃ
あんべわりなさ　畑見でこねばね
「のごい」って　あぐでついでも
稲刈りせば　ままける！
もっけだの　こんげえっぺもらて
もっけだの
こいだば何が返さねばねちゃ
もっしぇの
うんめごっつぉ　えっぺもらて
もっしぇの　おらほの村のしょだは

（1番のみ）

言葉は生きていて、時代と共に変化してきました。
方言研究、辞書編集、それぞれの視点から見る
庄内弁の今昔、特徴はどんなものなのでしょうか。

方言のれん（酒田市・中通り商店街）

「浜荻」に残る庄内弁

井上 史雄
東京外国語大学名誉教授

失われた庄内弁はどのくらいあるのだろうか。その手がかりとなる史料がある。明和4年（1767）、鶴岡出身で江戸勤番の藩士だった堀季雄が著した庄内の方言集『浜荻』。その書名は、次の古歌に基づく。

草の名も所によりて変はるなり
難波の蘆は伊勢の浜荻

『浜荻』に載る語の数は400語強。その中で今も使われている庄内弁を調査した。地域住民を対象に、「今も使うかどうか」を調査票に記入してもらい、「使う」と答えたら2点、「聞く」は1点。満点の400語×2点＝800点を100％として計算すると、大半の人が50％前後のことばを使っていた。よく使われるものから順に並べてみると、現代も使う日常語（あったまる）や、他県でも使われている有力な方言（なんぼ）などが残り、昔の衣食住に関することば（すぎはら＝和紙の一種）は早く廃れたことが分かった。

今の若者は方言を使わないというが、地元に残った人が、成人後に新たに方言を使い始めることがある。また共通語と方言を使い分けるバイリンガルも登場し、街の広告や看板に方言が使われることも多くなった。

方言を生かした本やカルタもある。このように庄内方言は大事にされているから、悲観する必要はない。

庄内サイダー「ビリビリデュー」（酒田米菓）

いのうえふみお／昭和17年、鶴岡市生まれ。東京外国語大・明海大名誉教授。方言にまつわる著書多数。12/1（土）には、生涯学習施設「里仁館」公開講座で「庄内弁の魅力 方言の面白さ、地域性、なぞを語る―方言は地域の宝―」をテーマに講演（要整理券）。詳しくは、里仁館 ☎0234-61-4361へ。

酒田地方の方言てぬぐい
（マリーン5清水屋 中村イトヤ）

辞書編集者から見た庄内弁

神永 曉
辞書編集者・元小学館辞典編集部編集長

私が初めて庄内を訪れたのは平成15年なので、庄内との付き合いはかれこれ15年になる。そのときは、三川町で行われた第17回全国方言大会を見に行ったのであった。

その後方言大会は終了したが、以後毎年のように庄内を訪れている。庄内でまず私の耳に響いてきた庄内弁は、「よぐきたの」「もっけだの」の、末尾につく「の（のう）」である。この「の（のう）」は、私が編集にかかわった『日本国語大辞典』による と、「語調を整えたり、詠嘆の気持ちを表したり、念を押したりする」語とある。とにかくこの「の（のう）」は、庄内の出身でない者にはとても印象深く聞こえるのだ。例えば、終戦前後に鶴岡市西目（旧上郷村）に家族と疎開していた横光利一は、このときのことを書いた小説『夜の靴』で、土地の人の会話文の中に「の（のう）」を盛んに登場させている。他の会話文は共通語になっているので、横光にとっても印象に残る方言だったのであろう。

末尾で使う語としては、「さけ・はけ」も面白い。関西方言の「さかい」から転じたもので、この語の異形は日本海沿岸地域に沿って分布域が見られる。北前船の影響と思われ、庄内と関西とは、ことばの面で近かったことを感じさせ興味深い。

庄内弁缶バッチ
（刺し勇 ☎090-9424-4528）

鳥海山マグカップ「まぐまぐでゅ～マグ」
（とがしスポーツ モンベルルーム酒田店）

かみながさとる／昭和31年、千葉県生まれ。元小学館辞典編集部編集長。NPO法人こども・ことば研究所副理事長。小学館に入社以来、30数年間、辞書一筋の編集者として『日本国語大辞典第二版』『現代国語例解辞典』など多くを手がける。自著に『悩ましい国語辞典』『微妙におかしな日本語』ほか。

庄内弁辞典

声に出して言いたい

クレードル編集部・選

庄内弁といっても、北と南、山側と海側、所変われば微妙に違って味わい深いものです。酒田、鶴岡の方言かるたを例文に話してみたくなる庄内弁をご紹介します。

「ちっとばし言い方違ってでもごめんしぇの」

※各語の意味は、佐藤雪雄著『庄内方言辞典』（1992）を参考にしています。

の

「ね」にあたる語尾

せばの～したばの～
んだの～まだの～
じゃあね またね そうね また明日ね

じょさね（じょっさね）

簡単、面倒でない、造作ない

はらくづ（はらくじ）

満腹

ゐも煮 えべ食て はらくづの～
芋煮 いっぱい食べて 満腹だぁ

やちゃくちゃね

だらしがない、乱雑

部屋の中 片づげねさげ やちゃくちゃね
部屋の中を片付けないから散らかって乱雑だ

じょんだ

上手だ

ゐじょんだな おらいの まぎだもの
絵が上手なのは うちの血筋なんだよな

びとびと

落ちつかないさま。
さわぐ、ふるえる、ゆするさま。

はかはか

はらはら、どきどき

やかやか

いらいら（気持ちが落ち着かない、気が立っているさま）

もしえ（もへ）

おもしろい、おかしい

ちょす

触る

まぐまぐ

むかむか、いらいら、もやもや

まぐまぐでゆう あんまりあちゃぐで やんだおら
頭がぼーっとして何も考えられないほど暑くて嫌だなぁ

わっわっつ（わちわち）

どんどん（しゃにむに、がむしゃらに）

んめ

うまい、おいしい

ぬか漬け でご漬け あぁんめちゃ
ぬか漬け 大根漬け あぁおいしいね

けもす（る）

かきまわす

けもしての よぉーぐ冷まして 食うなだぞ
かきまわしながらよーく冷まして食べるんだよ

あべ

歩こう、行きましょう

へっづげだのさ かもてらんねさげ ちゃっちゃどあべ
そんなものに かまってないで さっさと行くぞ

ねかねか

ねばねば

ぼかげる

追いかける

おぼげる

驚く

おぼげだちゃ こげ もっつもつど 雪ふって
驚いたなぁこんなにどんどん雪が降って

よぐたがり

欲張り、強欲な人

よぐたがり おいちゃも オランダせんべい わげでくれ
欲張り！ ボクにもオランダせんべい分けてくれ

うだる

捨てる

もっけだ

相手への感謝と、気兼ねし恐縮する2つの意

もっけだのぉ お土産 こげえっぺ いだいで
ありがとうお土産をこんなにいっぱいいただいて

ごげる

怒る、叱る

ごげらっだぁ～ すこたまががら ごげらっだ
怒られた～ メチャクチャ母ちゃんから怒られた

はやす

包丁で野菜や魚などを切る

そのでぇごん（大根）ほうぢょ（包丁）で 薄ぐ はやしての
その大根を包丁で薄く切ってね

まんきたげる

うらやむ、妬む、欲しがる

ちゃっちゃど

さっさと、早く、急いで。

ちゃっちゃどさねど 学校さ おぐれんぞ
さっさと支度しないと学校に遅れるぞ

のだばる

腹ばいになる

はがいぐ

捗る

おじまげる（おずまげる）

いいふりをする

いだまし

いたましい、惜しい。大事なもの、かわいいものなどへの愛惜の意。

おもやみ

思い病み、億劫、心配、気が進まないこと

おもやみで ひとりで行がんね 合コンさ
気が進まなくて1人じゃ行けないわ 合コンに

むつける

不機嫌になる、ふてくされる、すねる

がおる

疲れる、弱る

んだ

そう、そうです

んでねでば こうしてこうで こうだなや
そうじゃないよ ここはこうして こうするの

※「んだ、こっちゃよこせ（とれ、こっちによこしなさい）」の“んだ”はアクセントが異なります

城下町つるおか
子ども方言かるた
城下町つるおか子ども方言かるた
制作実行委員会 刊
問 ☎0235-22-7604（高樹）

酒田方言
いろはかるた
酒田方言あそび研究会 刊

酒田なつかし
いろはカルタ（トビラ写真）

酒田方言あそび研究会では「酒田方言データベース」を公開中。皆さんが知っている、使っている“さかたのことば”を集めたホームページです。
http://sakata-hogen.com/database/
こちらから言葉や画像、音声で登録できますので“おべっだ言葉、おしぇでの～”
お問い合わせは、書の庵 内
☎0234-22-4477／E-mail sakatakaruta@yahoo.co.jp

中村知美さんの手びねり

どことなく人を思わせる作品「ひとのらくだ」
庄内平野を囲むなだらかな山々を
モチーフにした作品「稜線」。独特な世界観を
表現する女性陶芸家が、庄内で活動中です

手びねりとは土器が誕生した縄文時代から存在する、手で土をこねて器をつくる手法である。電動ロクロを使わないこの方法は、丸い土の真ん中に穴を開けていく玉作りや、板状にした粘土をつなぎ合わせて成形するたたら作りなどがある。その中で鶴岡市大山在住の陶芸家・中村知美さんが一貫してこだわる手びねりの手法は、土台の上に紐状の粘土を積み上げていく紐作りである。

中村さんがこの手法で作品を作るようになったのは陶芸家として独立した20年前。きれいに整った形を作るロクロより、自由奔放な形を生み出す手びねりの方が自分の性に合うと感じた頃からだった。以来、土台に粘土の紐を数段巻き、指で押さえて接着したらまた紐を重ねていくという時間も手間もかかるこの手法で、彫刻的なオブジェや日常使いができる器などさまざまなものを作ってきた。曲線的で歪みのあるユニークなフォルム、紐と指の跡が残る素朴で原始的な風合い。その時々の土の状況を受け入れ、「粘土がいきたいように作る」中村さんにとって、手塩にかけて育てた作品たちは、我が子のように愛しいという。

ところでその中にちょっと不思議なものがある。花器にしては開口部が小さすぎるものや、容れ物として使うには不都合な形のものなどだ。これは、何も入らなそうな隙間や穴にも、何か入らないかと考えてしまう人間の心理をくすぐりたいとの思いから作り始めたのだという。オブジェなのか器なのか。定規で測られたようなモノに囲まれ、目的の決まったモノを使って暮らす中、中村さんの世界は、それとは違うモノの広がりを示している。

中村知美さんの作品は鶴岡市大山の「陶 中村展示室」にて、陶芸家のご主人・中村秀和さんの器とともに常設展示しています。また今回の掲載に合わせ、鶴岡市東原町のZESTでは掲載作品とオブジェを展示中。酒田市中町のZESTでもオブジェを展示しています（どちらも11月末終了予定）。この機会に中村ワールドに直接触れてみては。

陶 中村展示室 ☎090-2970-0632

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

秋澄む 大鳥池を歩く

放射冷却で冷え込んだ朝靄の中、芒の穂の露がきらめき転がる。こんな日は、靄が晴れるとどこまでも青い空が広がる。

季語

秋澄む（あきすむ）

秋になり空気が澄みきること。目に映るものだけでなくものの音も澄んで響くように感じる。

大鳥池と山小屋

鶴岡市大鳥は、国道112号から県道349号に入り、20キロほど南下する場所にある。冬は3メートル以上の積雪となる県内屈指の豪雪地帯だ。ここから新潟県境に位置する以東岳に向かう、朝日連峰の途上にある「大鳥池」は、海抜千メートル、湖面直径は南北1キロメートル、最大水深68メートルで日本では珍しい花崗岩地にあり、幻の魚「タキタロウ」がすむ神秘の池といわれる。

行く水も堰かるる水も澄みにけり

―岡崎るり子

大鳥から車で朝日連峰登山口の泡滝ダムへ向かい、登山道に入った。まぶしい朝日を浴びながら、水音に耳を傾け川沿いを歩く。小さな大文字草が精一杯手のひらを広げるように咲いている。しっとりとした空気が心地よい。山の斜面の所々に湧き水が見え、その傍にニホンカナヘビが姿を現した。山毛欅（ぶな）の森に入るとその天井は高く、森の中は何ともいえない安堵感に包まれる。それはとてつもなく大きなものに見守られ優しく抱かれているような感覚でもあった。

大文字草

東大鳥川

一画を欠く大文字草なんとせう

―中原道夫

東から流れ来る冷水沢に沿って登り続けると、幾段にも重なり落ちる七ツ滝に至る。喉を潤したいと思った矢先、湧き水がちょうど流れ出ていた。足元にはきのこたちが背比べをするように並んでいる。苔むした岩を登りきると、山毛欅林の隙間から尾根が見えてくる。と、目の前に大鳥池が姿を現した。蒼穹と、紅葉し始めた木々のコントラストがまぶしい。

森の中のきのこ

ひそひそと茸の山になつてゐし

―矢島渚男

湖面の水鏡には、色なき風が微かな漣（さざなみ）を呼び起こしていた。

湖の畔の山小屋が出迎えてくれた。赤川の源となる大鳥池は、昭和8年から、灌漑に湖水を利用するため水門の設置が始まった。大鳥池に流れ込む一滴の雫が、森の命を支え、私たちの生活を支えている。大鳥池の麓に立ち、以東岳を望む。以東岳からの眺望を確かめたい気持ちを、次に残した。

尾根の色づき

木に水に人は色なき風の中

―あべ小萩

山は秋のきのこや春の山菜など、暮らしに恵みを与えてくれる。厳しく過酷な冬があるからこそ、豊かな恵みとなるのだろう。実りと紅葉の秋が終わると、山は5月頃まで深い雪に閉ざされる。静かな湖面に抱かれ、われここいまに感謝した。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）